

(2) 中村西中学校

学 校 長 小野川 憲
校内研究代表者 沼瀬 美喜

1. 研究主題 『 見方・考え方をはたらかせ思考を深める授業づくり －「批判的思考力」と「論理的表現力」を鍛える－ 』

2. 主題設定の理由

令和6年度の全国学力定着状況調査の結果分析や令和6年度の校内研究授業協議での課題分析において、情報と情報の関係を適切に捉えることや、結論までに至ったプロセスを整理し、問われている事柄に対してより論理的に表現する力に課題が見られることが明らかになった。このような課題から、まずは既習事項や経験値とのずれを生み出す課題設定や発問によって生徒自身が問いをもって学習に臨めることが学習の基盤であり、全教科で共通して取り組む必要がある。また、教科における見方・考え方を働かせて解決に必要な情報を取捨選択しながら意思決定し、適切に表現する力を養う授業づくりが求められていることを全教職員で再確認した。

そこで、研究主題を昨年度から継続し、「見方・考え方をはたらかせ思考を深める授業づくり」とした。令和7年度の研究においては、批判的思考を働かせる場面の設定を重点取り組みの一つとして位置づけ、思考の深まりを図ってきたが、批判的思考に対する定義の共通理解を図ることの難しさや教科の見方・考え方に基づく批判的思考の深まりに課題が見られた。

そこで、全教科共通して「既習事項や経験値とのずれを生む思考のはたらき」を批判的思考の一面として位置づけ、場面設定だけでなく問いや発問の工夫として取り入れる。また、生徒が主体となり自ら課題解決する力を身につけるために、各教科の見方・考え方に基づく批判的思考を意識した発問の工夫など思考を深める授業づくりについてさらに研究を進める。また、単元終了時の生徒の姿をイメージした授業づくり、ICTを活用した振り返りの即時共有から新たな問いへと意図的につなげるなどの取り組みを通して、生徒の思考力・判断力・表現力等を向上させたいと考え、本研究主題を設定することとした。

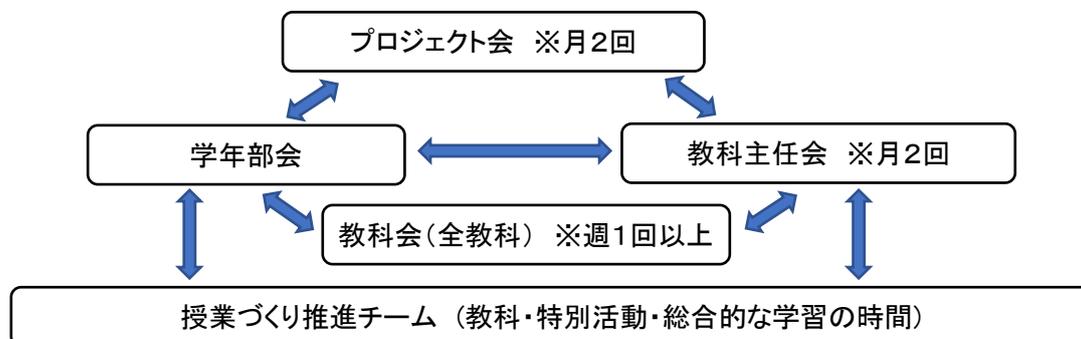
〔研究仮説〕

仮説1：見方・考え方や学習経験に基づく「批判的思考」を生徒から引き出し、それを意識した課題解決を行うことで、生徒が学習過程を自走し、思考を深めることができるだろう。

仮説2：生徒が自分の考えを論理的に表現する場面を設定し、教師が適切な見取りと評価を行うことで、生徒が自身の成長を実感し、意欲が向上するだろう。

3. 研究の進め方と方法

(1) 研究組織図及び研究方法



(2) 研究内容

I 授業研究を中心とした授業改善

- ・全校公開授業研究（教科1回、特別活動3回）
- ・授業スタンダードに基づいた授業者の心構え自己チェック（学期1回）
- ・授業評価アンケート（学期に1回）
- ・講師招聘（齊藤一弥先生）による授業研通覧（本年度1回通覧実施）

II 効果的なタテ持ちの教科経営

- ・教科主任会（月2回）
- ・教科会（週1回以上）

III 「教科」、「特別活動」、「総合的な学習の時間」を中心にした授業推進チーム

- ・各部会のリーダーを中心に指導案検討や活動内容の検討を行う（週1回）

4. 研究実践

（1）授業研究を中心とした授業改善

①全校公開授業研究（教科1回、特別活動3回）

論理的表現力の育成を図るため、5月に国語科で論理的表現を用いた言語活動を設定し全校研を行った。「自分の考え・事実・理由付け」の整合性を図り目的に応じた表現力を身につけることをねらいとした。事後協議の中では自分の考えと客観的事実は捉えているが、理由付けの部分に弱みがあることを確認し、全教科で育成していくことの必要性を確認した。

②授業者の心構え自己チェック（学期に1回実施）

自己チェックシートは「授業スタンダード」や研究主題と対応したものにしている。学期ごとに自己チェックを行うことにより授業改善に向かう意識を常に持ち続け、それを教科会で確認することによりタテ持ちの授業の質をそろえることを狙いとしている。昨年度実施していく中で、授業規律への肯定評価は平均して高かったことから、授業の質に関する項目やICTの活用に関する項目に重点を置いたチェックとなるように見直しを行った。

（2）効果的なタテ持ちの教科経営

教科主任会（月2回）

主幹教諭が中心となって計画し、全教科体制で実施している。今年度は、思考を深めるための手立てを中心にまた、昨年度、単元の目標やめあてについて全教科で形式を統一して作成したものを修正しながら取り組んだ。教科主任会で話し合った内容については教科会で周知するようにしている。

5. 今年度の成果と課題

【成果】

○授業評価アンケート 研究主題に関わること

項目1「授業や単元の最後には、学習内容を振り返ったり整理したりできていますか。（振り返り問題を解くことを含む）」肯定的評価 80.4%（1学期）、2学期 81.5%（2学期）

○論理的表現力とはどのような力か、共通理解を図ることが出来た。

○生徒の振り返りにおいて知識の理解から活用へと変容が見られた。

【課題】

●授業自己チェック

項目1「付きたい力をもとに、生徒の学習の様子や発言を適切に見取り、生徒の考えをつなげたり深めたりしている」 肯定的評価 71.4%

●授業評価アンケート

項目2「授業や単元の最後には、学習内容を振り返ったり整理したりできていますか。（振り返り問題を解くことを含む）」 肯定的評価 80.4%（1学期）、2学期 81.5%（2学期）

授業自己チェックでは、「付きたい力をもとに、生徒の学習の様子や発言を適切に見取り、生徒の考えを繋げたり深めたりしている」の項目で肯定的評価が7割であった。ICTの普及により他者参照などを用いて横のつながりはもたせやすくなったが、教員の見取りも即時に行う必要性が高まっている。授業評価アンケートでは、「授業や単元の最後には、学習内容を振り返ったり整理したりできていますか」の項目が最も肯定的評価が低く、教科間での差も大きい。どの教科でも学習の定着が図られるように振り返りのモデルや活用方法について確認をしていく。